

戸惑いの花嫁2 ―後編―サンプル

中出しという言葉がリアルで、気付いたらイってしまっていた。高まる快感に浸りながらではなく、気付けば勝手に出てしまっただけの射精。呆気ないというか、快感を取りこぼしたような残念な射精に未練が残る。

「ああ……」

気持ち良かったはずなのにすっきりしない。でもイってしまったので身体は重い。しかも昨夜の二度、そして今も二度と短期間で四回も絶頂したせいかな、さすがにもう勃起はできそうになかった。

「ああ……やだぁ……」

激しい絶頂がしたかったのに。きちんと快感を意識して、高まる様子も感じ取って、快感の強さを調整して少し焦らしてみたりして、たくさん楽しんでもうこれ以上は無理となつてから思い切りイきたかったのに。

「ああ……ああ……」

つらい。苦しい。いったのに、イってないみたい。なのにもうペニスは萎えてしまった。ちゃんと気持ちよくなっていないのに。

「ミキ？ どうした」

「あ……」

様子がおかしいと思ったのか、蒲生が心配そうな顔をみせた。結局ずっと仕事を中断させてしまっていたと気づき、罪悪感と、上手にイけなかった悔しさが心を支配する。

「ミキ」

頬に手が添えられ、正面からじつと顔を見つめられる。顔色のチェックなのか、表情から感情を読み取るうとしてくれているのか。

「どうした。つらいか」

「……上手にイけなくて」

ショックで細かく説明する気になれなかった。たかが射精一回分。でも心にしこりが残るほど、衝撃的な快感だったのだ。二回目だからこそもっと敏感で怖いほどの刺激でイけると期待していた。

「見せてごらん」

蒲生が和紗のお尻を優しく押した。意図に気付いた和紗が身体を動かし、小さくなったペニスが露わになる。

「……萎えてるな」

蒲生はしゃがみ込み、手で掬うようにしてペニスを確認した。それはローションと二回分の精液でとろとろに濡れ光り、興奮による体温の上昇でまだ熱を持っている。

「……康生、和紗の中を」

「はい。奥様、失礼いたします」

アナルからデイルドが――康生のペニスがずると抜けた。普段ならそれだけでも感じて

しまうのに、今は気分が落ち込んでいるせいか喪失感も覚えなかった。
そのまま後ろのソファに座るように言われ、ふらふらと腰を下ろす。

チャッというファスナーを閉める音と、カチャカチャというベルトの音。そしてすぐ、横から康生が腕を伸ばした。

「ご確認ください」

和紗のアナルに挿し込まれた器具。つまみを回すと、くちばし形のそれが口を開いた。

「あ……あ……」

苦しいのか、気持ちいいのか。和紗が小さく喘いだ。

「和紗、中身が出るように身体を起こしてくれ」

「は、いつ」

和紗が上体を上げ膝立ちになると、ゆっくりと中から白い液体が零れ落ちた。それを康生がシャーレで受け止める。

「あ……」

恥ずかしい。自分の出した精液がみんなに確認されてしまっている。

「まだ出ます……」

和紗が言うのと、またとろ……と粘り気のある液体が落ちてきた。恐らくローションが混ざっているからだろう、落ち方がとてもいやらしい。

「や……やだ」

見ないで、と言いたかった。でももう身体が重くて、言葉を発するのも億劫で。

「和紗、ミキは射精できたのか」

「はい、二回射精なさいました」

アナルから垂れた精液を受け止めたシャーレは蒲生によって匂いを確認され、それから量を量ると言って香澄に回された。まるで検査だ。でも、検査ではない。

「ミキ、もう一度ペニスを見せてごらん」

隠してはいない。そんな気にすらなくて。それに蒲生の言葉を見無視するつもりもなかった。でも本当に指の一本も動かしたくないほど身体が怠くてそのままぼうっとしていると、蒲生がもう一度ペニスを持った。

「気持ち良くイケなかったのか」

「ん……」

「タイミングが合わなかった？」

「……ん」

厳密に言えば「タイミング」という問題ではなかった。どちらかというとききを間違えたのだ。物理的な快感でイきたかったのに、精神的な刺激でイってしまった、というような。そして空イキだったらよかったのに精液が漏れてしまった。

「そうか、つらかったな」

だがまだ今日初めてのことだから、と蒲生はそっとペニスを撫でてくれた。

「頑張っているのがよく分かったよ。とても可愛かった」

「誠司さん……」

「慣れたらもつと上手に腰を振れるようになる。そしたら今日よりもつとめと気持ちよくなれる」

「ん……」

優しい慰めの言葉だった。頷くと「いいこだな」と唇に触れるだけのキスをくれる。

「もう一度イこうか」

「や……もう……」

「なら処理をしよう。——大樹」

「はい」

大樹が何やらボタンを押した。するとゆっくりと背もたれが倒れていく。

「わっ」

「ベッドになる。さあ、横になりなさい」

ソファベッドだったのか、と驚きながら身体の向きを変えて横になると、隣に蒲生も寝転んでくれた。上半身だけ服を脱ぎ、腕枕で抱き寄せるようにして口に乳首を含ませてくれる。

「んう……」

まだ小さなままの乳首を吸いながら目を閉じると、途端により一層身体が重くなった。安心したからなのか、疲れを一気に自覚したような。

「失礼いたします」

大樹の声だった。ペニスをつままれる感触の後、熱くぬるぬるのものがペニスを包んだ。

「あっ」

「ミキ」

大丈夫だ、と言われ、もう一度頭を引き寄せられた。いわゆるお掃除フェラは慣れないけれど、仕方がない。

「痛みはございませんか」

口が塞がっていたので、返事は頷くだけに留めた。身体が重いだけで痛みはないので、上体だけで蒲生に甘える。目視で確認されていたのか、もう一度口に含まれ、皮を剥いた状態でねっとり液体を舐め清められた。

「んっ、んう……」

「ミキ、可愛い……」

嬌声を漏らすのが嫌で、必死に蒲生の乳首に吸いついて声を殺す。その必死さが響いたのか、蒲生が艶っぽい息を吐いた。

「——旦那様、奥様のペニスは熱を持っておりますが特にお怪我はございません」

「ああ」

「では続いてアナルの確認をいたします」

そちらもされるのか——でも、アナルは洗浄をしていない。嫌だ、と言おうと頭を引こうとした途端、やはり読んでいたらしい蒲生の腕に阻止されて。今度は頭だけでなく、ぐっと腰も引き寄せられてアナルの確認がしやすい姿勢に変えられた。

「ミキ、大丈夫だと言っただろう。デイルドを使ったのは初めてなんだから、きちんと怪我がないか確認しておかないと」

（大丈夫なのに……）

痛みはない。むしろ今頃になって喪失感を覚えているくらいだ。でも発言は許されず、乳首を吸うことで羞恥心を誤魔化して。

（あつ……）

アナルに指が入ってきた。きつとまた今回もコンドームはつけられていないのだろう。

「旦那様、内部に摩擦熱はないように思います」

「入れていただけだからな。そのうちミキが腰を振れるようになれば熱を持つようになるだろう」

それでも大樹の指は中を丁寧に改めた。前立腺も撫でられ、でも身体が怠すぎたせいか反応はしなくて。そのことに少しだけ安堵していると、指が抜かれた。

「異常はございませんが、奥に便がございました。十八時の洗浄前に便意がくると思います」

「分かった。——ミキ、ちゃんとうんちが出そうなら自分で出すんだよ」

「んう……」

無理だ。だつてきつとオムツにしろと言われるのだろう。しかも開いたままの状態で。

「……まあ、慣れるまでは難しいかもしれないな。大樹、終わりでいい」

「はい」

今回の確認は思ったよりも早く終わった。手洗いのためか大樹が退室し、いつの間にか香澄もいなくなっていたことに気付く。

（……和紗さんのお尻から出た精液持ってたもん……）

量を知らべると言っていたから、きつとそのために出ていったのだろう。昨夜は調べられなかったのに、と思うと少し不思議だけれど、セックスとオナニーの違いというものもあるのかもしれない。

「康生、和紗も今日はもう休んでいい」

「ありがとうございます」

（あ……）

思ったより休みが多いんだな、と思った。ちら、と蒲生を見上げると首を傾げられたけれど、人を酷使するような人じゃなくてよかったな、と安堵する。

「奥様、とても上手なオナニーでした」

アナルを貸す——寝取られが本当に趣味なのか、和紗は嬉しそうな顔で褒めてくれた。それにはほっとしたし嬉しかったけれど、「この人とセックスしてしまったんだ」と思うと気恥ずかしくて。

「あの……ありがとうございます」

上体を起こして俯きがちなまま頭を下げると、二人はとんでもございません、と優しい声で返してくれた。

「ミキ、本当に頑張ったな」

横からのキスを受けながら二人を見送る。すると、和紗の足が震えていることに気が付いた。

「あ」

「はい？」

先に振り返ったのは康生だった。和紗は身体がつかいのか、少しゆっくりとした動作でこちらを向いた。

「あの、和紗さん、」

足が、と歩み寄ろうとベッドから降りた瞬間、視界が崩れた。

「ミキ！」

「奥様！」

「いたた……」

身体が怠いとは思っていたけれど、足に力が入らないとは思っていなかった。恐らく慣れない動きをずつとしていたので疲れたのだろう。

「ミキ、大丈夫か、怪我は！」

「奥様！」

「ドクターを呼んできます！」

~~~~~

「それでは本日のミーティングを始めます」

今日の司会も金田だった。そして顔ぶれが少し昨日と違うのは休暇の関係だろう。

（何人いるんだろう……）

かなりたくさんいる気がする。全員を覚えるのはいつになることやら、と少し不安にもなるけれど、やはり早く覚えたいし、普段から話す機会のない調理スタッフにもなるべく積極的に話し掛けていきたいと思う。

（服さえあればなあ……）

そうしたら蒲生の仕事中でも気軽に部屋から出て屋敷の中を見て回るのに。そして仕事の手伝いなんかをしながら交流を深められれば住んでいても楽しいし、みんなのことも早く覚えられる。

（……やっぱりもう一度言ってみようかな……）

言うのはタダだ。どうせダメだと言われるのだろうけれど、みんなの顔を覚えるまでも、と言えばOKを貰えるかもしれない。

「奥様は昨日の午後、初めての腰振りオナニーを経験された。オナホールは和紗、デイルドは康生。まだスムーズに動くことはできないようですが、慣れるまではみんな静かに見守るように」

今日もされた恥ずかしい報告。穴があつたらどころか、掘ってでも入って埋まっていまいたい気分。

「その際、抜くことなく二回射精された。ひどくお疲れになり、立ち上がる際にソファから落ちて右手首を捻挫されているので普段より一層気に掛けるように」

全員が頷き、数人がペンを走らせた。

「それから昨夜セックスはなし。その分今夜は長くセックスの時間を取れるよう、十七時には洗浄の開始。場所は執務室のソファでかまわない。――奥様も御承知おきください」

「は、はいっ！」

突然の呼び掛けに顔を上げると、全員がこちらを向いていた。その後で金田の発言の意味を思い、一気に熱くなった顔を隠すためにまた下を向く。

「オナニーによるペニスへの損傷はないが、今日からペニスカバーと陰嚢カバーを装着してお過ごしになれる。まだ試作品とのことなので、排尿時はより一層丁寧な確認をすること。カバーについて気付いたことがあれば大樹に報告するように」

そこまで言い切ると、金田がこちらを向いた。

「申し訳ございません、奥様ご起立いただけますか」

「えっ」

「みんな、まだペニスカバーを見ておりませんので」

「あ……」

「ミキ、さあ」

蒲生が先に立ち上がり、肩を支えるようにして立たせてくれた。

（恥ずかしい……）

みんなの視線が自分の陰部に集まっている。ただの挨拶で自然とそこに意識が向けられているというのでもなく、今はそこを見るためだけにこちらを向かれている。

「ペニスカバーの根元部分はゴム、陰嚢カバーはゴムと紐で支えている。もしリボンがほどけそうだと気付いたら落ちないように縛り直してやってほしい」

「せつ、誠司さんっ」

ペニスや陰嚢を手で支えながらの説明。それだけであまりの羞恥に頭が爆発しそうなのに、陰嚢を支えるリボンを縛り直してほしいなんて。

「それくらい自分でっ」

「ダメだ。手首が痛いだろう。手を使つてはいけないよ」

分かるね？ と、言い聞かせるようなこめかみへのキス。それをされるともう、反論はできない。

「まだ慣れないので痛みや痒みが生じるかもしれない。だがこの通りミキは初心だからな。我慢してしまう可能性もある。ミキが自分から不調を訴えられるようになるまではみんなの方から声を掛けてやってほしい」

「はい」という返事は揃っていた。他の内容なら頼もしいと思うその一体感も、今の話を思うと素直に感動することもできなくて。

満足気に頷いた蒲生に促され着席すると、ペニスが少しだけ反応してしまっていることに気が付いた。みんなに気付かれていないだろうか、と不安になっていると、蒲生の人差し指

がいたずらに先端を突いた。

「っ！」

「可愛い」

耳元での囁き声。カアアアとすでに熱かった顔がさらに熱くなった。

「奥様、退屈ですか」

「あ……」

蒲生の仕事中、声を掛けてくれたのは香澄だった。

「いえ、そんな……」

正直に言えば退屈だった。仕事中の蒲生はいつまでも見ていられるけれど、視線に気付いている蒲生がちよこちよここちらを向いてくれるのが申し訳なくて。かと言って他に見るところもすることもなくて、結局蒲生を見ることになってしまつて。

「そろそろ排尿しておきませんか」

「あ……」

優しい言い方だった。こちらの心情を気遣つたような。蒲生や大樹もちろん優しいけれど、香澄の言い方はそれよりもさらに穏やかで、優しい物言いだった。

「膀胱炎になりますと、つらいですから」

「……はい」

まだ自分から排尿を言いだせないことを分かつていて、それとなく水分摂取量と時間を見て声を掛けてくれているのだ。我慢するほど強い尿意はなかったけれど、うつすら重苦しいような感覚は確かにあった。

「あの……」

でも、香澄にとつては幹人の排尿はあまりいいものではないはずだ。幹人が排尿するとうことは、恋人である大樹がペニスを咥えて直接飲むということだから。

しかし、香澄はきよとした顔で小首を傾げていた。

「……やじゃないんですか」

「何がでしょう」

「その……僕のおしっこ……」

香澄はまたきよとん、とした。けれどすぐ気付いたようで、優しく笑ってくれる。

「……ああ、いえ、そのように思うことはございません」

「でも……」

優しいから、だからきつとそう言ってしまうのだ。だって普通なら——ここにいる人全員が「普通」の感覚が世間一般と同じかどうかは分からないけれど——嫌だと思うことのはずだから。

「奥様、香澄は部屋に戻った後、奥様の尿の味を教えろとせがむんです」

くくく

「奥様、楽な姿勢でかまいません」

奉と仕は淫らなボーシングを求めてはこなかった。時間が掛かるからなのか、蒲生と同じように眠ってしまっているという。

座っている方がいいけれど、絵にどれくらい時間が掛かるのか分からない。途中で腰が痛くなったり体勢がつかなくなったりするのは嫌なので、申し訳ないと思いつながら横になってもいいかと訊くと、二人は双子らしく全く同じタイミングで頷いた。

「奥様、ベッドに変更いたします」

大樹がボタンを操作すると背もたれがフラットになった。導かれるまま真ん中に仰向けで寝転ぶと、奉か仕のどちらか——申し訳ないけれどまだ見分けがつかない——が足首に触れた。

「失礼いたします。少しだけ足を開いてください」

「あ……」

下から覗き込まれるのは恥ずかしい。でも二人が描くのだから、任せるしかない。

「はい……」

肩幅に足を開くと、一人は足の間から、もう一人は腰の隣から眺めるようにして腰を下ろした。

「途中、体勢がつかったり、尿意を感じたりしましたらご遠慮なくおっしゃってください」

「はい……ありがとうございます」

これは自分がお礼を言うべきところなのだろうか……と思いつながらも氣遣ってもらったことには変わりなくて。氣恥ずかしいけれど寝転んだまま会釈すると、二人はふっと笑顔をくれた。

「奥様の可愛いペニス、きちんと可愛く描きますので」

「射精でお疲れでしょうから、眠ってしまってくださいね」

くたりと力の抜けたペニスはじっと観察されても勃起する気配はなくて。そのことにほっとしていると、早速二人は鉛筆を握った。

シャッシャと紙の上を鉛筆が滑る音が響く。感じる視線。こんな風にじっとペニスを観察されるのなんて初めてだった。

（ああ……）

どうしてこんなにいやらしいことを受け入れてしまっているのだろう。顔をずらし蒲生を見ると、書類を睨みつけるようにして読み込んでいた。恐らく時間が無いのだろう。この三日間、ほとんど仕事できていないはずだ。

（ごめんなさい誠司さん……）

もっと早くこうして素直になつていれば今よりもう少しは蒲生も楽だっただろう。理性やプライドなんてさっさと捨ててしまえばよかった。

（でもそうしたらもつとえつちなこと……）

ここでの常識がどのようなものかはまだ分からない。でもきっと、想像もつかないような



いやらしいことを求められるような気もする。

(きつと気持ちいいんだろうな……)

恥ずかしい思いはたくさんしたけれど、痛いことは一度もなかった。浣腸は苦しかったけれど、指で栓をしてくれていたので苦しみは感じて自分でも自分で力を入れて我慢するという苦痛はなかった。

「っ……」

思い出したら少しかペニスが動いてしまった。急いで下を見るけれど、勃起には至っていない。でも少しだけ位置がずれてしまったような気がする。

「奥様？　いかがなさいましたか」

「あ……」

話し掛けてきたのは腰の隣に座っている方だった。

「あの……おちんちん、ちよつと動いちゃって」

「ごめんなさい、と言うと、笑われた。」

「大丈夫ですよ。おちんちんも生き物ですから。それにぐったりしているわけではなくて安心しました」

さすがの気遣い。内容がこんなことでなければもっと感動したのにな、と思いながらも一度「ごめんなさい」と呟く。

(二人にはおちんちんがないんだよな……)

たま洗い風俗というところに勤めるにあたって、二人はペニスをとってしまったと言っていた。なのにこうしてペニスを観察しながら絵を描き、ペニスの状態について優しく慰めるなんてつらくないのだろうか。

(洗ってくれるときも丁寧だし……)

もし今自分のペニスがなくなったら、きつと泣くどころの話ではないと思う。まるで幼い子供のように声を上げて泣き、ぐずり、ペニスを持っている人を恨めしく思うだろう。

「今日一日では描き終えないので、勃起も排尿も我慢なさらないでくださいね」

「え……そうなんですか」

「色まできちんと塗りたいので、数日お願いしたいところです」

「はい」

何日もペニスを曝すのは恥ずかしいけれど、二人の身体のことを考えていたせいか、普通に頷いてしまった。

「ありがとうございます。嬉しいです」

それから二人は無言のまま、真剣な顔つきで絵を描き続けた。絵なんて中学の美術で描いたのが最後なので詳しいことは分からないけれど、手の動きの速さからしても恐らく下書きのようなものなのだろう。シャッシャという迷いのない音を聞いているうちに、いつの間にか眠ってしまった。

「ミキ」

「ん……」

「ミキ、起きられるか」

「ん……誠司さん……」

声のする方に腕を伸ばす。目を開けられていなくても、蒲生はちゃんと腕の間に入って抱き留めてくれた。

「おねむだな」

「ん……」

身体がひどく怠かった。特に腰から下がすごく重い。まるでそこだけ重力が三倍かかっているような。

「そろそろ昼だが、もう少し寝ようか」

「あ……え、もう……？」

急いで目を開けるけれど、見えるのは蒲生のシャツだけだった。顔を振って胸に擦りつけ、それからゆつくりと身体を離す。

「射精で疲れたんだろう」

「あ……あれ、奉さんと仕さんは？」

「昼食の準備に行ったよ。寝顔もペニスも可愛いと嬉しそうにしていた」

「つ……やだ……」

恥ずかしい。裸のまま眠ってしまったなんて。

「もう少し寝ているといい。私も仕事をしてから」

「いえ、起きます。すみません、誠司さんの仕事中に」

それを言うなら、仕事中にいやらしいことをしているのも謝るべきだよな、と思ったけれど、口にすることはできなかった。

「いいんだ。可愛い寝顔を見ながら仕事するのも心地いい」

（心が広いなあ……）

蒲生はいつも「ミキは何をしても可愛い」と言ってくれていた。寝ていても、食べていても、ぐずっても拗ねても甘えても、えっちな気分になっても、何でも。今だって、普通は仕事中に目の前で眠られたら普通は嫌な気持ちになるところなのに、寝顔を見ながら仕事するのもいいとか、昨日だって「えっちな声を聞きながらの仕事が幸せ」みたいなことを言ってくれていた。

「誠司さん、抱っこ」

「ああ、おいで」

「抱っこでご飯がいいです」

「ああ、もちろん。まだ手を使ってはいけないからね。だがその前におしっこをしておこうか」

「ん……抱っこのまま」

「ああ」

寝起きのミキは甘えん坊だな……という嬉しそうな声を聞きながら、ソファに座った蒲生の上に対面で座ってぎゅうぎゅうと抱きつく。

「誠司さん、おっぱい」

「ああ」

なんだかめちやくちやに甘えたい気分だった。身体は怠いし、性的なことを受け入れた自分が恥ずかしいし。本当は胸を吸いながらの排尿というのだってすごく恥ずかしいことだけれど、それはもう慣れてしまった。

「大樹」

「はい」

横になった蒲生の乳首を咥えると、すかさず蒲生が大樹を呼んだ。ペニスに触れる指。剥き出しのままのそれをつまむようにして持たれ、先端だけを咥えられる。

「あ……もう出ちゃう……」

後編約4万3千文字です。

よろしくお願いいたします。

戸惑いの花嫁2 ―後編― サンプル

gooneone (ごーわんわん)

2020/9/6

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @gooneone11

Instagram: gooneone

